

新農業人が次々に育つ安平町で 有機農業で自立していく道を追求

「またたび Farm」と「ハラハチファーム」の歩み

2年前に「オーガニックビレッジ」を宣言した胆振管内安平町には、野菜づくりや畑作、平飼い養鶏などに携わる新規就農者が多い。2017年に6戸の農家で設立した「安平町有機農業推進協議会」のメンバーは現在、10戸に増えた。うち7戸はリーダー格の小路健男さん(北海道有機農協代表理事組合長)が創った研修農場(本誌9月号を参照)を経由して新農業人になった人たち。既存農家からの参入や他地域から移転してきた人もおり、それぞれの略歴や経験などを活かし、有機農業で自立していく道を追求している。第6回の新・農業人シリーズでは、15年前に道北の愛別町から移り住んだ「またたび Farm」と、大豆や小麦の自然栽培に挑戦している「ハラハチファーム」の歩みを紹介する。

(ルポライター・滝川 康治)



「またたび Farm」では6棟のハウスでトマトやキュウリを有機栽培

営農を続けるには条件が良くなかった。そこで2010年、子どもたちが通った小学校が閉校になるのを機に、雪が少なく、もう少し暖かい地域で有機農業をやろうと考えた。

**有機のリーダーの近所で営農
子どもも育ち地域活動にも参画**

日本海側の町や洞爺湖周辺、胆振管内、札幌近郊などを訪ね歩き、定住の地を探す。畑はあれど住宅のないところでは仕事がいかに……。

「僕らはもともと消費者。『有機というやり方ならば農業をやってみよう』と思い、この仕事を始めた。今さら、その生き方は変えられません」(利一朗さん)と力を込める。

有機農家6戸12人が集い、「安平町有機農業推進協議会」が17年に誕生し、新規参入者の育成・相談など多様な活動を展開している話は9月号

そんな中、91年に新規就農した小路さんが所有していた物件には住宅が付いていた。セカンドハウス用に購入したものだだったという。

「小路さんのところと、うちの子の年齢が近いことも安平への移住を決断する要素になりましたね」と、利一朗さんが当時をふり返る。

こうした経緯をたどって安平に移り住み、新天地での生活を始めてから15年の歳月が流れた。

俣野さん夫妻には現在、12歳から28歳までの3男2女がおり、全員に樹にまつわる名前を付けている。今では、長男の桂さんは夏場のトラクター仕事を手伝ってくれる。農場の仕事は、利一朗さんが大豆やカボチャ、トマトの生産などを担当し、葉子さんはキュウリを専門に手がける。



北の愛別町から移り住み、大豆やカボチャ、ハウス栽培の野菜を手がける「またたび Farm」の俣野利一郎・葉子さん夫妻(左)と、大豆と小麦の自然栽培に挑戦する「ハラハチファーム」の中村欣さん

**田舎暮らしを求め道北の愛別へ
就農を経て新天地を模索する……**

本誌9月号で紹介した小路健男さん(北海道有機農協代表理事組合長)の農場がある安平町の追分地区。「またたび Farm」を営む俣野利一郎さん(1967年、埼玉県生まれ)と妻の葉子さん(69年、横浜市生まれ)は、今から15年前に道北の愛別町から同地区に移り住んだ。今では、4ヘクタールの農地に大豆やカボチャなどを、6棟のハウスではキュウリを中心に栽培する。

飯金店を営む家庭で育った俣野利一郎さんは、地元の高校を卒業後、北海道大学農学部に進んだ。河川について関心があり、環境関係の勉強がしたかったという。北大では森林関係の勉強をして、大学院でも学ぶ。本屋の家庭で育った葉子さんは北大時代の同期で95年に結婚。院生時代は積丹町の有機農家などでの実習生活も体験する。

ふたりが結婚した年、友人のつてを頼って愛別に移り住んだ。

「安平に比べ雪が多く、耕作期間も短いなど好条件ではなかったけれど、何も考えなかった(利一朗さん)」

「わたしは田舎で暮らしたかったし、北海道には憧れがありましたね。外で働くのは苦ではないし、草取りも好きですよ」(葉子さん)

移住の翌年、俣野さん夫妻はまだ幼ない長男・桂さんとともに町内の協和地区に定住し、夏場は農家の手伝いなどのアルバイト生活を送る。さらに98年から99年にかけて農業研修を重ね、2000年には晴れて新規就農者の認定を受けた。

夢を実現した2人は3ヘクタールほどの農地を借り、ジャガイモやスイートコーン、ニンジン、アスパラガス、トマト、インゲンなどを有機栽培し、北海道有機農協などに出荷した。しかし、農地の取得は実現できないままだった。

市街地から数キロ離れた協和地区の環境は気に入っていた。

「小さな集落でしたが、近所の人たちから子どもが親切にもらった仲良くなった人もいて、今でも行き来していますよ」(利一朗さん)

「わたしは田舎で子育てがしたくて、保育の仕事に30年近く続けてきました。愛別時代に通年で保育の仕事も始めたんです」(葉子さん)

愛別での生活には愛着があったが、



収穫期を迎えた「ハラハチファーム」の大豆畑。独自の管理方法で育て、草が少ない

そんな中で、10年に札幌市内で開催された同公社主催の「新規就農フェア」の出席ブースで小路さんに出会い、北海道有機農協の存在を初めて知った。「うちに来て（実際の姿を）見学しては」との助言を受けて農場を訪れると、自給自足をベースに米や野菜などを作り、中村さんの理想に近い農業を営んでいた。地理的にも実家や札幌に比較的近い。

11年春、10年間のサラリーマン生活にピリオドを打ち、安平で2年間の夫婦での研修生活をスタート。1年目は第二子が誕生したため欣さんのみの研修で、小路さんらとともに一通りの作物を栽培。2年目には夫婦で20〜30アールほどの圃場を管理し、10種類ほどの有機野菜の栽培から収穫、出荷までを学んだ。

大豆と小麦の自然栽培にも挑戦 持続可能な農業に確かな手応え

13年には、小路さんの農場の一部1・3ヘクタールを借り、新規就農が実現した。そして2年後、約4・5ヘクタールの離農跡地を取得し、現在地に移転・独立している。新規就農から10年間ほどは、多品目の野菜づくりを経て、栽培した中玉トマトのジュース加工も手がける。「忙しすぎて記憶がないくらい働いてきました。それほど有機農業で生活するのは大変でした。ふたりでフルに働き苦勞をかけたので、今は妻に楽をさせたいと思いますね」

農地を取得できる機会が増え、現在は町内数カ所に合計約30ヘクタールを所有する。規模拡大にともない、ここ数年は小麦と大豆、緑肥を10ヘクタールずつ輪作するやり方を柱にした自然栽培を試み、収穫した農産物は有機農協に出荷する。

かつてのトマト栽培はやめ、大豆と小麦以外では「道の駅」向けの露地

で紹介した。日本国内の耕地面積に占める有機栽培の割合を50年には25%に拡大する——という、農林水産省の「みどりの農業システム戦略」を踏まえ、いまだ道内外で「オーガニックビレッジ」の取り組みが進んでいる。安平町は23年に「オーガニックビレッジ」を宣言した。

その具体的な事業のひとつが「農福連携」の試みだ。俣野さんの農場にも現在、会社勤めになじめない人らがふたり一組で訪れ、作業を手伝ってくれている（平日のみ）。

「札幌のコーディネーターが人材を探し、農場に同行してくれます。とても暑くなるハウスの中で、真面目に働いてもらえるのでありがたいですね（利一郎さん）」

北海道有機農協の理事を務めるから、たわら、「オーガニックビレッジ」の活動にも携わる葉子さんは、物事を前向きに捉えている。

「有機農業は環境にやさしく、おいしい農産物で持続可能な社会ができる——これからの時代を考えると良い農業だと思いますよ。（23年の）宣



ハウスに隣接する畑では大豆も栽培する

言後は少量ですが学校給食に有機農産物を使ってもらっているのです、今後より進めていけるといい。わたしは、生産農家と有機農業などを応援する消費者がともに実行委員になっている『オーガニックファスタ』にも参加しています。ただ、安平には若い仲間がいっぱいいるけれど、なかなか一般市民に広がらない、といった課題もありますね」

地域や家族らの協力を得ながら、俣野さん一家の環境に負荷をかけない有機農業の営みが続く。

家庭菜園が高じて新規就農へ 研修農場で実践的に有機を学ぶ

中村欣さん（78年、芽室町生まれ）、美香さん（76年、札幌市生まれ）夫妻が営む、町内の安平地区にある「ハ

ラハチファーム」。家庭菜園が高じて新規就農の道を志し、今では約30ヘクタールの農地で大豆と小麦を中心にした自然栽培を手がけるようになった。

教員の家庭に育った欣さんは、地元の高校を卒業し、札幌市内にあった北海道東海大学に進み、得意のバレーボールに明け暮れた。一時期は選手をめざしていたようだ。大学卒業後は2011年までの10年間、北広島市内の印刷会社で電気関係のメンテナンス業務に携わった。

サラリーマン時代に美香さんと結婚し、08年には長女が誕生。農業との関わりは、この頃にさかのぼる。出産後の美香さんは乳栓炎に罹り、助産師から「食べものを見直すといいですよ」と助言を受けた。

「それまで僕はジャンクフードを食べ、産地や添加物も気にせず、食べものが母乳になることも、よく知らなかったのです。でも妻の病気をきっかけに、無添加の食品や有機農産物、産直などに対する関心が生まれました」

安心・安全な食べものを求める気持ちは高まり、市民農園を借りるなどして野菜類の栽培を始め、「有機農

物アスパラガスを少量生産する程度。自家用の米や野菜類を作り、20羽ほどの鶏も飼養する。

「大豆・小麦・緑肥」の輪作体系は、十勝管内音更町の畑作農家・中川泰一さんが開発してきたもので、本人の協力を得て導入した。堆肥や発酵鶏糞などの有機肥料も投入せず、自然栽培のやり方に近い。

「僕の原点は、無農薬・無肥料の奇跡のリンゴ」で知られる、青森の木村秋則さんの取り組みでした。就農した時には、そのやり方は無理でしたが、大豆や小麦の有機栽培ができることは分かっていた。今は有機肥料も投入しませんが、大豆の収量はむしろ増え、小麦は逆に少し減りました。（自然栽培は）環境負荷が少なく、食料有事の際にも対応できる持続可能な農業のやり方です。『肥料がないと農業はできない』という常識を覆えると思います」

と、確かな手応えを感じている。時代は変化し、有機の大豆や小麦に対する引き合いは強くなっているという。慣行栽培から転換する農家も増えてきた。中村さんはこう話す。「まず、この輪作方式を軌道に乗せ、安定生産できることを立証していき



「道の駅」に常設されている有機農産物や平飼卵の販売コーナー

業を仕事にできたら、どれだけ幸せなことか」という思いが募っていく。美香さんに相談すると、「やりたいことがあるなら応援するよ」と背中を押してくれた。

しかし、当時は有機で研修できる農場は少なく、ある自治体では有機農業のことを話題に出すと拒否反応を示された。北海道農業公社の新規就農担当者にも相談したが、門前払いのような対応だったという。



大粒の「ゆきほまれ」（写真）と小粒の「ゆきしずか」の2種類を栽培

たい。安平には水はけの悪い転作田があり、タイミングよく草を抑える方法をどうするかといった課題もある。米づくりは現在20アールほどで収量も少ないけれど、販売用をもう少し作りたいですね」

有機農業のリーダーが自身の農地の一部を研修農場に提供することで、新農業人が次々に育つ安平町。その取り組みに対し、より多くの農業関係者や消費者がサポートすることが求められる時代を迎えている。